

コンゴ北部熱帯森林における野外研究の現状

竹 内 潔¹⁾・西 原 智 昭²⁾

The Present Situation of Field Survey in Tropical Forest of Northern Congo.

Kiyoshi TAKEUCHI¹⁾ and Tomoaki NISHIHARA²⁾

はじめに

コンゴ共和国北部の熱帯森林帯における日本人研究者による野外調査も、1985年に端緒が開かれてから10年の歳月が過ぎた。ここで、これまでの調査の流れをかんたんに振り返るとともに、我々が進めている研究についてその現状を報告したい。

1. コンゴ北部の熱帯森林帯と日本人による調査研究

コンゴ共和国の総面積は約34万km²、日本の本州ほどの国土が南北に細長く伸びている。熱帯森林は国土の約65%を占めるが、その大部分は北部に集中している(図1)。総人口約210万のうち8割以上は南部に集中しており、北部地域とりわけ森林帯に覆われている最北部のリクアラ(Likouala)、サンガ(Sangha)の2州の人口密度は平方キロメートルあたり0.6人から0.8人ときわめて希薄である。この2州の森林帯には、車両の通行が可能な道路はほとんどなく、主要な交通路は河川であり、住民は長距離の移動には喫水の浅い小型定期船を、日常的な通交には手漕ぎのカヌーを利用している。このような外来者にとっては不便な交通事情を反映してか、コンゴの熱帯森林帯での学術調査は、植民地時代の行政官などの散発的な調査を別にすれば、近年までほとんどおこなわれることはなかった。森林帯の南東部には広大な湿地帯が発達しているが、この湿地帯の奥深くに位置するテレ湖(Lac Télé)には「恐竜」らしき生物が生息しているという噂が絶えず、その真偽を確認すべく何度か探検隊が組織されている⁶⁾。外部からの大規模な経済開発が入り込んでいないコンゴの北部には、今なおこのような探検の時代のロマンが息づいている。しかし、言うまでもなく、この地域が「原始」を現在にとどめるロスト・ワールドである訳はない。この森林帯あるいは地域住民の生活も、コンゴの他の地域と同様、歴史的に、とりわけフランスによる植民地化以降、外部からの社会経済的な影

響や圧力を蒙ってきた。しかしながら、学術的な知見という面にかぎれば、近年までその自然環境や住民について信頼できる情報が伝えられなかった地域であったことは間違いない。

この学術的にはいわば手つかずであったコンゴ北部の熱帯森林の調査の先鞭をつけたのは、弘前大学の丹野正であった。1985年10月、丹野は日本人としてはじめてコンゴ北部リクアラ州に入り、同州のウバンギ(Oubangui)川沿いの森林帯で狩猟採集民アカを対象に予備的な調査をおこなった。1987年に、丹野は再度リクアラ州北部でアカを調査し、「分配」にアカの集団生活を支える生活論理としての意義を見いだした(丹野, 1991)。この年には黒田末寿(滋賀県立大学)、佐藤弘明(浜松医科大学)が加わって、西隣のサンガ州まで含めたコンゴ北部の熱帯森林帯のほぼ全域が日本人によって踏破されることとなった。黒田はコンゴ国森林経済省のオコ博士とともにリクアラ州の森林に生息する霊長類を予察し、佐藤はサンガ州の西端ソアンケ(Souanké)地区で定住化が著しい狩猟採集民バカの生業活動と居住パターンについて調査した(黒田, 1991; 佐藤, 1991; Sato, 1992)。この踏査行のなかで、丹野は佐藤とともにコンゴ、カメルーン、中央アフリカ三国の国境の交差点に位置するボマサ(Bomassa)村に入り、村東方のンドキ(Ndoki)川周辺の森林が焼畑農耕や狩猟などの人為的影響をほとんど受けていないことを発見した。

こうした広域調査をもとにして、1988年から霊長類学、人類学の分野でそれぞれ集中的な調査が開始された。まず、丹野の情報をもとに三谷雅純(兵庫県立人と自然の博物館)がンドキ川を渡り、東岸の森林域(以下では、たんに”ンドキの森”と呼ぶ)でゴリラとチンパンジーが同所的に生息していること、またこの類人猿2種を含めて霊長類の生息密度がきわめて高いことを明らかにした(三谷, 1990a, b; Mitani, 1990, 1991, 1992; Mitani *et al.*, 1993)。三谷の調査によってンドキの森が霊長類の研究にとって絶好の調査地であることが確認され、以後、三谷をはじめとして、黒田、西原、鈴木 滋(京都大学)、

¹⁾富山大学人文学部 Faculty of Humanities, Toyama University

²⁾京都大学理学部 Faculty of Science, Kyoto University

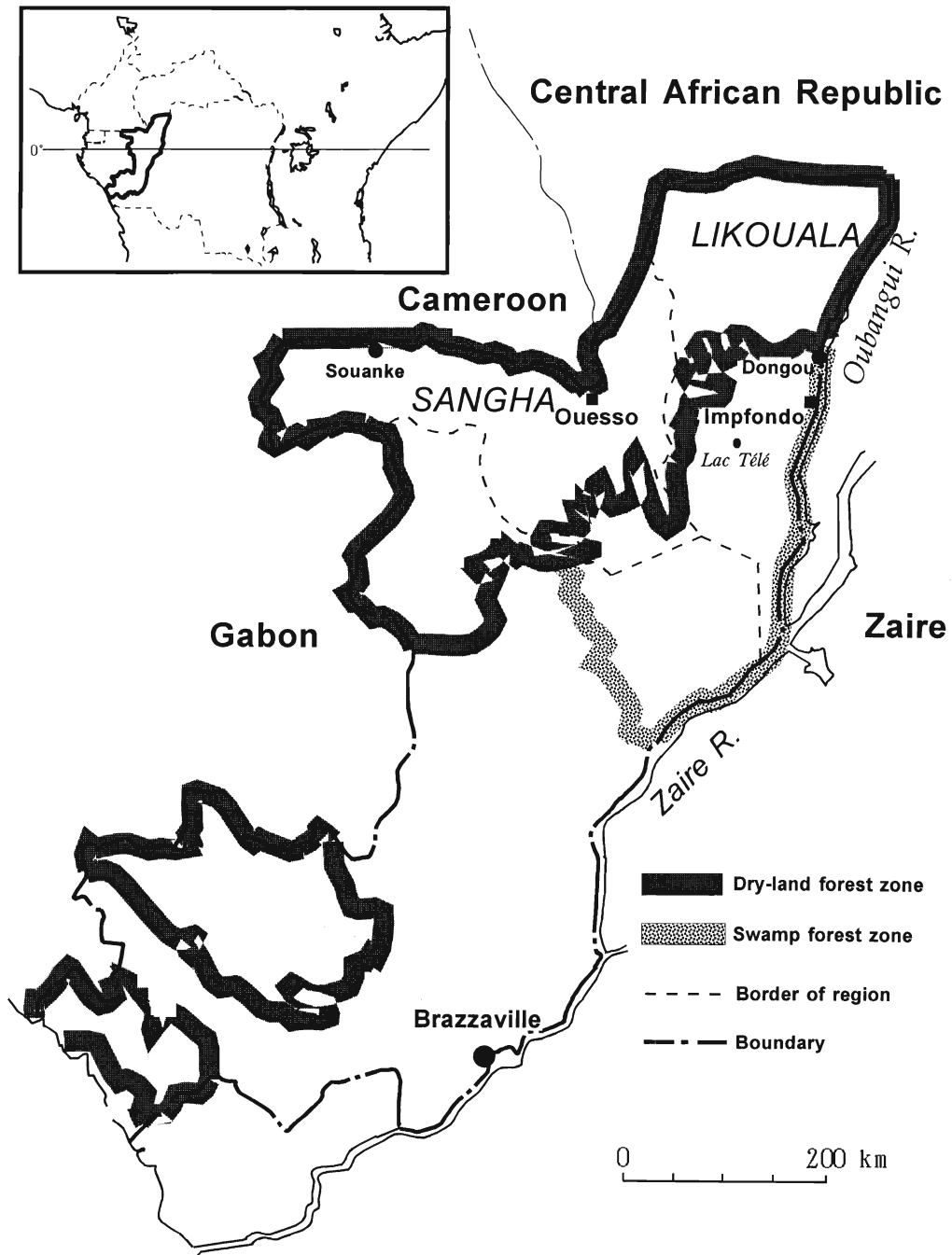


図1. コンゴの熱帯森林帯.

山極寿一(京都大学), 丸橋珠樹(武蔵大学)らの霊長類研究者が, 霊長類の生態調査を継続してきている.

一方, 丹野のリクアラ州での人類学調査の後を受けて, 竹内が1988年から同州の北部を流れるイベンガ(Ibenga)川及びモタバ(Motaba)川上流で狩猟採集民アカの環境利用や集団編成などを対象として継続的な調査を開始した. 1991年から翌年にかけては, 寺嶋秀明(神戸学院大学)と市川光雄(京都大学)を中心とする研究チームが, 同地域で森林の持続的利用をテーマとして調査をおこなった(市川, 1993). さらに1992年から1993年にかけては, 加納隆至(京都大学)と安里 龍(琉球大学)が類人猿に対

する狩猟圧を調査している(Kano & Asato, 1994). また, サンガ州の西端では, 佐藤が狩猟採集民バカの調査を継続し, バカの食物規制, 民族医学について報告している(佐藤, 1993a, 1993b).

以上のコンゴ北部での現地調査は, いずれもコンゴ国の政府機関や研究者との協力のもとで実施されたが, その制度的な基盤となったのが1989年3月にコンゴ政府と京都大学アフリカ地域研究センターとの間に結ばれた『科学・技術に関する協力協定』であった. この協定にもとづいて, これまでに, 日本人研究者がコンゴ側から調査実施上の便宜を受けるだけでなく, コンゴ人研究者

を客員研究員として日本に招へいするなどの相互協力が進められてきている。

2. コンゴ国の政情不安と調査活動の中断

コンゴでの調査は順調に進展していくかのように見えた。しかし、1992年になって、コンゴの政治情勢の急激な悪化のため、やむなく調査活動を一時中断せざるを得ない状況となった。コンゴは独立間もない1964年から長く一党独裁の社会主義体制をとってきたが、80年代後半の石油価格の暴落に起因する経済危機に共産圏の民主化という世界的な政治的潮流が加わり、1991年に複数政党制へと移行した。しかし、複数政党化は一党独裁体制の下では抑制されてきた地域間対立を顕在化させ、翌年の大統領選挙を契機として政情は不安となり、1993年には首都ブラザビルで武力衝突が頻発するという危機的な状況を呈するに至った(武内, 1992, 1993, 1994a)。このような半内乱状態に直面して、調査活動の続行は不可能となったのである。しかし、翌1994年2月には事態は急速に政治的収拾の方向に向かいだし(武内, 1994b)、その後市民生活が平静を取り戻したという情報を確認して、竹内と西原が調査を再開した。1995年現在では、コンゴ国の情勢は落ち着いており、調査活動に支障をきたすような問題は生じていない。しかし、政情が小康を保っているのと裏腹に経済状況は1994年1月のアフリカ・フラン(CFA)の対仏フランレートの切り下げ措置以後、諸

物価が上昇しさらに悪化の途をたどっている。したがって、生活不安を背景として再び政治的対立が紛争にエスカレートする事態が懸念されるところである。

3. 研究の現況と今後の課題

以下では、類人猿と狩猟採集民の研究のこれまでの成果と今後さらに考究を必要とする課題について、それぞれ西原と竹内の資料を中心にして概述する。

3-1 類人猿の研究

霊長類研究の主調査地となっているのは、上述したように、中央アフリカとの国境に近いンドキの森である(図2)。近隣のボマサ村には少数の農耕民と現在では定住している狩猟採集民バンゴンベおよびバンベンジェレ⁶⁾が生活しているが、ンドキの森は少なくとも半世紀以上にわたって人為的影響を蒙っていないと推測される。このンドキの森一帯は、1993年末に『ヌアバレ・ンドキ国立公園』としてコンゴ国から指定を受け、現在では公園内では、適切規模で実施される調査研究活動を除いていっさいの人間活動が禁じられている。この公園内には、2種の類人猿、ニシローランドゴリラ(*Gorilla gorilla gorilla*)とツェゴチンパンジー(*Pan troglodytes troglodytes*)を含む11種の昼行性霊長類が生息している。ここでは、類人猿の生態学的側面に関する1992年までの主要な成果について記述し、その後現在西原が進めている調査に

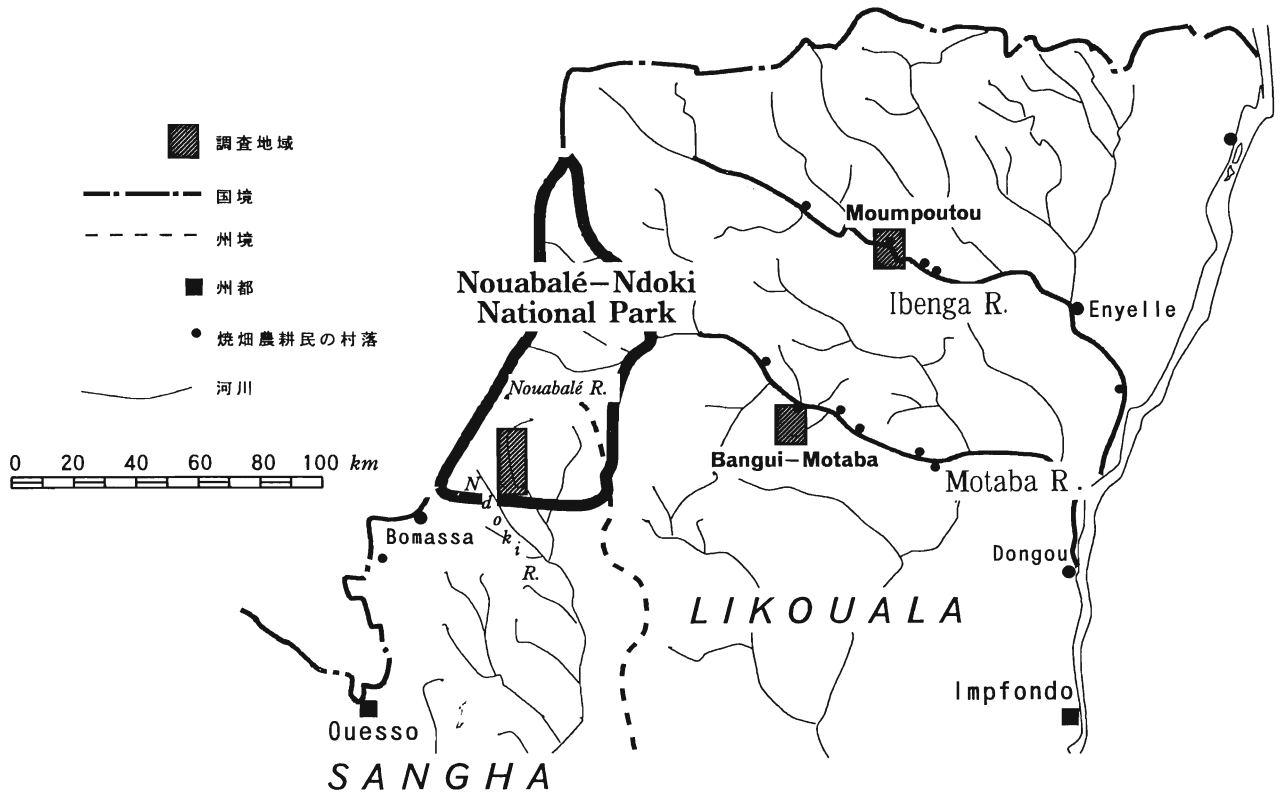


図2. 調査地.

ついて報告したい。

調査域面積約20km²内の生息密度はゴリラが1.92-2.56頭(西原, 1994), チンパンジーが2.65頭(Suzuki, 1993)と他の調査地に比べてきわめて高い⁶⁾。ゴリラの中心的な食物は植物の繊維性部分であるが, 果実生産量が多いときには果実も頻繁に採食する(Nishihara, 1995)。これに対しチンパンジーの食物は年間を通して果実が中心である(鈴木・西原・黒田, 1993; Malenkey *et al.*, 1994)。採食果実種については, ゴリラとチンパンジーの間で大きく重複しているが, 食物をめぐる競争的交渉は観察されておらず(鈴木・西原・黒田, 1993), ゴリラとチンパンジーが同じイチジク樹で採食した例さえ観察された(Suzuki & Nishihara, 1992)。一方ミネラルとタンパク摂取については, ゴリラとチンパンジーの間でニッチェの分化がみられる。チンパンジーが肉食や昆虫食によってミネラルやタンパクを摂取しているのに対し, ゴリラは草本類の茎や髄, 根, 新葉, 種子によってそれらをとっている(Kuroda, Nishihara, Suzuki & Oko, in press.; Kuroda, Suzuki & Nishihara, in press)。また, ゴリラは年間を通じて湿性草原を頻繁に利用し, ミネラルやタンパクが豊富に含まれる水草を採食する(Nishihara, 1995)。

チンパンジーに関してはシロアリ採食の際に, 突き通し棒とブラシという2種の道具を組み合わせるという, これまで他地域でのチンパンジーでは報告されていない新しいタイプの道具使用行動が観察された(Suzuki *et al.*, 1995)。

類人猿に限らず野生霊長類の行動生態の詳細を明らかにするためには, 観察者の接近に慣れさせる「人付け」作業は必須であるが, 1992年までゴリラの「人付け」はかばかしくは進まなかった。平均すれば2日に1回の割合で観察は可能であったが, 森林内の見通しが悪い上に, 下生えが多くないため通り痕が頼りの追跡観察は困難であった。1994年に広域調査を行なった結果, 西原は湿性草原が「人付け」に最もふさわしいという予見を得た。湿性草原は森林よりも見通しがよくゴリラにとって重要な採食場であり, またゴリラが水草を採食する際に出す様々な音, たとえば水草の根についた泥を洗い落とす音やゴリラが発する「採食グラント」とでも呼ぶべき音声などが, 調査者にゴリラの存在を教えてくれる。じっさい, 湿性草原とその隣接場所でのゴリラの観察頻度は, 以前の調査地と比べほぼ2倍に跳ね上がった。また, ゴリラが湿性草原への出入り口として頻繁に利用している地点の樹上に, 地上6mから10数mの高さで観察台を設けてモニタリングした結果, 少なくとも3つのグループと2頭のソリタリーがこの草原を利用していることがわ

かった。そのなかの若いシルバーバックは, 台上の観察者に気がついていても関わらず, すぐにその場を立ち去るようなことほとんどなかった。こうして, 湿性草原で徐々にではあるが確実に「人付け」が進行しつつある。

ゴリラの行動で興味深いトピックは, 湿林沿いの林床, とりわけ湿性草原に隣接する *Gilbertiodendron* 優占種の林床で観察されることが多い「土掻き行動」である(Nishihara & Kuroda, 1991)。この「土掻き」が見られるのはいくつかの特定の場所に限定されており, ゴリラはそこを繰り返し利用する。当初はこの行動は昆虫やミミズなどの小動物を探索・摂取するための行動だと推測されたが, 土掻きを真似しておこなってみた結果, 土中から小動物を発見できる頻度はきわめて低かった。その上, ゴリラの糞中には土中の小動物のキチン質等が発見されていない。また, 西原の観察では, ソリタリーのゴリラが33分にわたっておこなった土掻きの間, 彼が何かをつまみ上げて口に入れたのはわずか2回だけであった。しかも, ゴリラが「土掻き」のために反復利用する特定の場所が, 他のそうでない場所に比べて小動物がより発見されやすいという確証も得られていない。以上から, 「土掻き行動」は, 摂食行動としてはさほど効率的な行動であるとはいいがたい。またゴリラはいくつかの特定の場所から湿性草原に出入りするのだが, 「土掻き行動」がその出入口に当たる林床に集中していることがわかった。じっさい, 湿性草原に入る前あるいはそこから出たあと「土掻き行動」が観察された例もある。このような例は, 「土掻き行動」が採食効率だけでは説明できない, 別の行動学的な意味をもっていることを示唆している。

また, ゴリラは湿性草原への出入りの際, 隣接する常緑林のなかを集団ごとに「一列縦隊」をつくって移動する。この「一列縦隊」の観察例のうち, シルバーバックが先頭になっていたのは約半数にすぎない。ウガンダ, ルワンダ, ザイール国境のヴィルンガ火山群に生息するマウンテンゴリラ (*G. g. beringei*) では移動時にシルバーバックが常に先頭に立つというが(山極, 私信), ニシローランドゴリラではいつもシルバーバックが先導するわけではないのかもしれない。

「土掻き行動」にしろ「一列縦隊」にしろ, これらは湿性草原付近に限定された行動であるかもしれない。しかしながら, すでに述べたように湿性草原はノドキのゴリラにとって重要な生活場所であり, これらの行動の観察によって, ニシローランドゴリラの行動生態の特徴を明らかにしうると考えられる。

ゴリラに比べるとチンパンジーの人付けと個体識別は順調である。1994年以降上記のようなゴリラの調査と並行して, 湿性草原に隣接する約20km²の森林においてチ

ンパンジーの調査も進められている。すでにこれまで30頭以上のチンパンジーが個体識別され、そのうちの何頭かはよく人付けされている。場合によってはベッドからベッドまで終日直接追跡が可能となった。現時点ではまだ資料が少ないが、あるチンパンジーの1日の活動記録によると、観察時間中に採食時間が占める割合はよく人付けの進んだケナガ・チンパンジー(*Pan t. schweinfurthii*)の資料とほぼ同じであった(Takenoshita & Dzomambou 未発表資料)。このことは調査地でもチンパンジーの人付けがかなり進んでいることを裏付けている。また終日追跡が可能になったことにより、チンパンジーが樹木の新葉を頻繁に採食することが観察された(Takenoshita & Dzomambou, 私信)。今後資料が蓄積されれば、果実の少ない季節には、繊維性食物を頻繁に採食する傾向が認められるかもしれない。

チンパンジーについて興味深いトピックは、社会的性比(集団内のオトナオスの個体数をオトナメスの個体数で除した値)が約0.8(Suzuki, 1993; 西原, 未発表資料)であり、これまで調査されてきた他の亜種ケナガ・チンパンジーとマスク・チンパンジー(*P. t. verus*)と比べて非常に高いことである。これらの亜種で社会的性比が低いのは、オスが子殺しにありケースが多いためと考えられているが、ンドキの資料はツェゴチンパンジーでは子殺しが稀にしか起こらないのか、あるいは起こっているとしても性別とは無関係に子殺しが起こっているという二つの可能性を示唆している。この点を確認することは、これまでほとんど何も知られていないツェゴチンパンジーの集団生態を明らかにする上での一つの重要な課題となるだろう。

ンドキにおけるわれわれの一連の類人猿研究は、これまで研究の歴史が浅く未知の部分が多く残されていたニシローランドゴリラとツェゴチンパンジーの生態、行動、社会を徐々にではあるが、明らかにしつつあるといえる。今後さらに知見を得ていくためには、これまで同様、両種の人付け、個体識別を継続して進めていくことが何にも優先する課題である。

1994年以来継続中の調査地では、彼らの生息環境である森林植生に関する調査も並行して進めてきた。調査域に設定したトランセクト上において、ゴリラやチンパンジーが果実、新葉等を食物として利用する主要樹木種をすべてマークし、それぞれの植物個体を対象に、利用される植物部位の生産量とその時間変化、2種の類人猿による消費量などを査定・記録している。現時点では対象植物種の種数は10数種にすぎないが、今後さらに対象種数を増すことによって両類人猿の食物資源の森林内の分布だけでなく、資源量と消費量との関係の理解を通じて、採食生態及び両類人猿の種間関係がより詳細に解明され

よう。さらに今後長期調査による資料の累積によって、森林資源量や消費量の季節変化、年変動なども検討可能となろう。

ンドキに生息するゴリラ・チンパンジーはまた、果実採食時に種子を嚥下し糞の中に排出するといった種子散布者でもある。アフリカ熱帯林における種子散布者としては、類人猿ほかゾウ、昼行性オナガザル、鳥類などがあげられるが、類人猿の種子散布による森林再生メカニズムはまだ解明されていない。原生熱帯林における森林再生を論じるにあたって、ゴリラとチンパンジーの役割を検証することもまた、今後の重要な課題の一つである。

3-2 狩猟採集民の研究

ンドキの森の東方、60kmほど距離を隔てて流れるイベンガとモタバの両河川沿いに、焼畑農耕民の村落が点在している(図2)。ンドキの森近くの村落には農耕民と狩猟採集民が混住しているが、この地域の狩猟採集民アカは、川沿いの農耕民の集落を取り巻くように、内陸部の森林に遊動キャンプあるいは小集落をつくって生活しており、地域によって差はあるものの、遊動生活を完全には放棄していない。農耕民よりアカの方が人口は多く、調査した2地域では、村落から半径8km以内に農耕民の1.5倍から2.5倍の数のアカが居住している。

1988年から1991年にかけての二度の調査で、竹内は農耕民の民族集団を系統的に整理するために、村落ごとに基本的な語彙を蒐集し、また原住地を聞き込んだ。その結果を示したのが図3であるが、この地域には言語や出自を異にする多彩な農耕民集団が村落を単位として分布していることがわかる。また、両河川の最上流の村落の農耕民は *Irvingia* 属のナッツから採った油を好んで利用するが、他ではヤシ油を用いるといった類の生活文化の諸側面においても集団間の差異が認められる⁶⁾。これに対して、アカは広域に分布して各地域で異なる農耕民集団と社会経済的関係を持っているにも関わらず、同一の言語(Guthrieの分類にしたがえば、バントゥーC10系統)、超自然的存在や創世神話を共有している。

さて、コンゴ盆地の熱帯森林帯の東端部、ザイル東部に居住する狩猟採集民ムブティについては、これまで長年にわたって日本人研究者が生態人類学的調査をおこなって、すでに精密な報告が蓄積されている。そこで、そのムブティと比較対照して、アカの社会経済生活に顕著である特徴を挙げてみたい。

第一に、アカの生業活動について。交換経済や商品経済が浸透していないアカの生業活動には自己生計維持(autosubsistence)的な特徴が見られる。ムブティでは網罟で得た獣肉を農耕民やトレーダーの農作物と交換する生計を確立していることが報告されている(Tanno, 1976; Ichikawa, 1986)。これに対して、アカは狩猟で

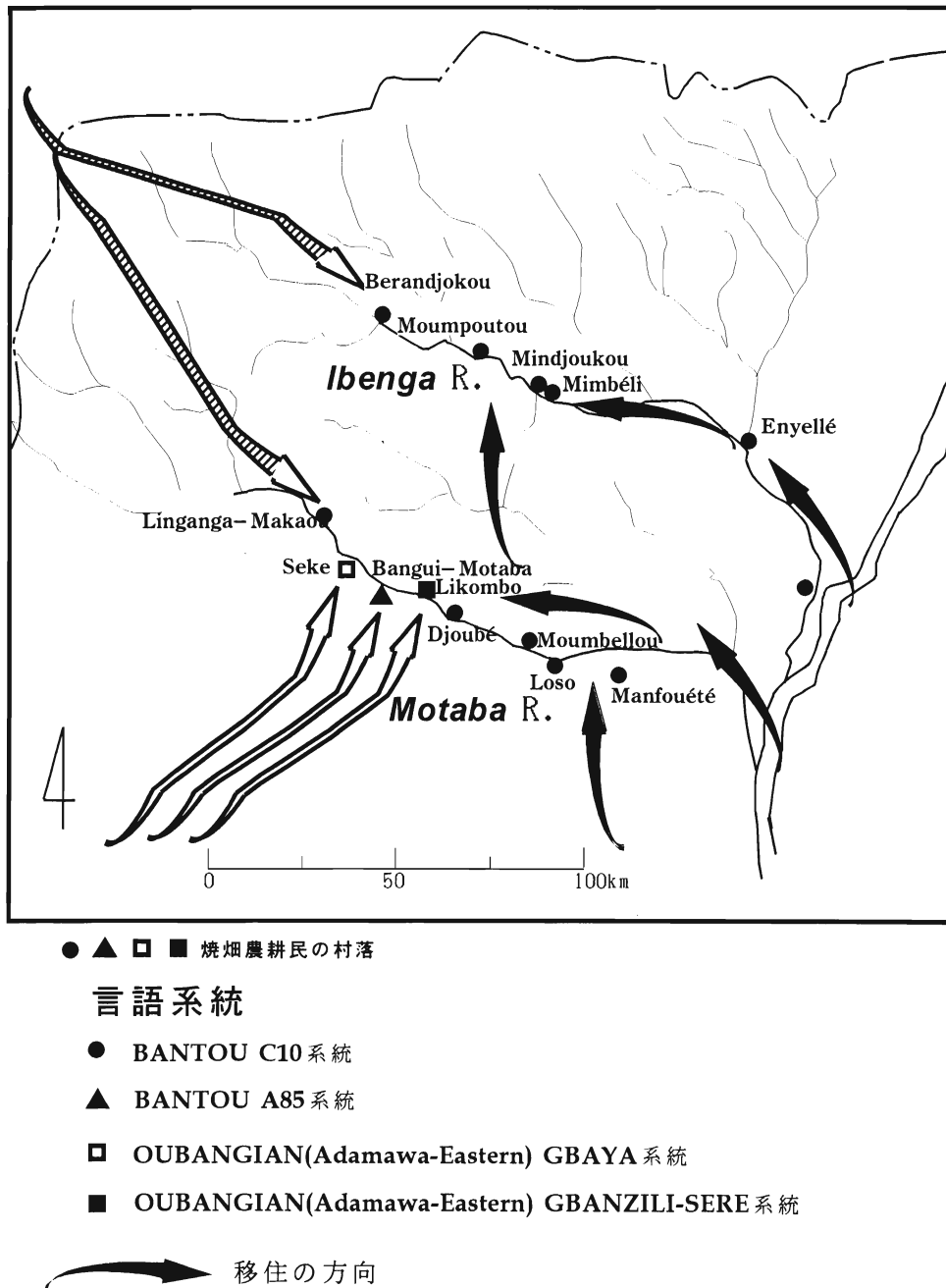


図3. イベンガ=モタバ地域の農耕民.

得た獣肉のほとんどを自家消費し、その一方で精力的に野生食用植物を採取している。さらに、アカが参加者の多寡に応じた多彩な狩猟技術を発達させることによって狩猟と採集への労働投入のバランスをとっていること、また狩猟活動の中心である網猟では自家消費するだけの獣肉を捕獲して、余剰獣肉を得るためのことさらな労働強化はおこなっていないことも明らかとなった(竹内, 1995b)⁶⁾。これらの特徴は、獣肉の商品化という経済環境のもとで生業努力の大半を網猟での大量の獣肉の捕獲に投じるムブティには見られない。

第二に、アカの社会生活と生業活動の関わりについて。ムブティの居住集団の構成は地域によって大きく異なる

が、たとえば市川が調査したテトゥリ地域では50人から90人程度が父方居住傾向の強い集団を形成している(市川, 1987)。アカの居住集団は一般的に、kombetiと呼ばれる一人の年長男性を中心として彼のきょうだいや既婚の子どもなどの大家族、多くても30人程度からなる家族集団である(竹内, 1991)。家族集団を越える持続的なまとまりは存在しないが、アカの間に見られる様々な食物規制は、個々の家族集団を通底する性や世代といった社会的カテゴリーを喚起する文化的な装置となっている(竹内, 1994)。また、この文脈では、複数の家族集団が共同して遂行する網猟も、狩猟禁忌や獲物の分配規則を通して参加者に自らの社会的アイデンティティを認識さ

せる儀礼性を担っている(竹内, 1995a).

第三に、アカと近隣農耕民との関係について。アカと農耕民の間には、農作物の供与を主とする農耕民のアカに対する庇護を基盤として、親子の扶養・被扶養関係を模した擬制的な親子関係が取り結ばれ、個々のアカは特定の農耕民の父系親族集団に属して、「親方」である農耕民に労働力を提供する。しかし、この関係を正当化しているのは、農耕民の贈与の論理であり、特定の相手に対する集中的な負債を回避する「分配」を社会生活の基本に据えるアカの生活論理とは否応なく対立する(竹内, 1991)。したがって、先行贈与の回収を目指す農耕民とそれを無視しようとするアカとの間でときに紛争が生じるが、しかし、関係が両者にとって互恵的であるがゆえに関係性自体を覆すような決定的な対立は回避される。アカと近隣農耕民の間に結ばれている、民族集団間の優劣を規定する一方で互恵的であるというアンビヴァレントな関係はこれまでムブティの研究で強調されてきた、蛋白質供給者である狩猟採集民とカロリー供給者である農耕民が生態学的に「共生」というシェーマ(Ichikawa, 1986など)におさまるものではない。

以上のアカの社会経済に見られる諸特徴は、これまで短軀という生物学的表徴によって広大なコンゴ盆地に散在する様々な狩猟採集民をひとしなみに”ピグミー”という語のもとに押し込めてきた、しかもおうおうにして最も低身長であるムブティの社会や生業を「典型」としてきた、トートロジカルな生物学主義について再考を促すものと考えられる。

さて、これまでのムブティなどのアフリカの狩猟採集民研究では、ナイーブな文学的感性よりも、具象のレベルで徹底して数量化を計る、いわば”ハードボイルド・タッチ”の客観主義が前面に押し出されてきたとも表現できる。狩猟採集民研究がそのような自然科学的傾斜を見せた大きな理由としては、現存する狩猟採集民社会に見られる諸特徴を人類進化を復元する資料として活用しようとする企図があったことを挙げることができよう。進化論的な観点から、たとえばカラハリのブッシュマンの集団生活に見られる離合集散性や社会関係の平等性が注目を浴びたのである。ところが、最近になって、自律的な狩猟採集民社会は、じつは進化史的な所産ではなく、たかだかここ百数十年の間に生じた歴史的産物にすぎないという指摘や批判がなされるようになってきた(たとえば, Wilmsen & Denbow, 1990)。すなわち、狩猟採集民社会は、植民地状況のなかで「特異な適応」を遂げてきた社会であり、流動的なメンバーシップや個人間の平等性を基礎づけている社会の非制度的性格は、強大な外部勢力に直面し、逃散して本来の社会生活を解体してしまった悲惨な歴史的経緯の産物だと解釈される(清水, 1992)。

このような狩猟採集民研究に全面的な再考を迫る問いかけに対してここで十分な考察を試みるゆとりはないが、コンゴ北部での今後の研究課題と重ね合わせて、次の二点を指摘しておきたい。まず第一に、狩猟採集社会に見られる社会的特徴を、たとえば植民地化といった一過性でしかも地域によって多様な経過を辿った歴史的事件におしなべて帰一させることは、それらを狩猟採集という生業形態に還元してしまうのと同様に、そのような社会を現実につくりあげている人々の能動的なダイナミクスを黙殺してしまうことにはならないだろうか。丹野は「分配」が食料の配分にとどまらず生活を「分かち合う」、アカの生活論理であることを示しているが(丹野, 1991)、狩猟採集民が生きる現実を明らかにするには、一見すると「特異な」社会生活の根底にある論理を日常行動に視点を据えて読み解く、きめの細かな研究の進展が望まれるように思う。第二に、とは言うものの、狩猟採集民がどのような権力関係に組み込まれているかという問題がこれまでの狩猟採集民研究のなかで十分に意識されてきたとはいいがたい。既述したようなアカと近隣農耕民とのローカルな関係から、ネーション・ステートに包摂されつつあるアカといったレベルまで、狩猟採集民が生きる現在の様々な政治的状況を展望する視野と感受性が、今後さらに必要とされるであろう。

おわりに

以上、我々がコンゴ北部の熱帯森林帯で進めている研究の概要と課題について、ラフなスケッチを描いてみた。類人猿研究にせよ、狩猟採集民研究にせよ、この地域での調査研究が、既存の報告や学説に対して、新たな事実や視角を提出する可能性を豊かに秘めていることを示しえたと思う。調査活動を続けるうちに深く関わるようになったこの地域の森林保護の問題については、稿を改めて記述することにした。

注

- (1) 旧称はコンゴ人民共和国(République Populaire du Congo)であったが、1992年にコンゴ共和国(République du Congo)と改称された。
- (2) 1980年代には早稲田大学探検部の学生たちが探索を試みている(早稲田大学探検部, 1988)。
- (3) 「バンゴンベ」も「バンベンジェレ」も本来は農耕民が彼らと呼ぶのに用いていた他称であり、それぞれ前者はカメルーンからコンゴ西部に居住するバカ(Baka)、後者はコンゴ北部から中央アフリカに居住するアカ(Aka)と呼ばれる狩猟採集民と同系統の民族集団だと考えられる。

- (4) 例えば、コンゴの他の地域でのニシローランドゴリラの平方km²の生息密度は0.1頭(Fay & Agnagna, 1992), 近隣の中央アフリカの森林で0.89-1.45頭(Carroll, 1988), ガボンで0.008-0.44頭(Tutin & Fernandez, 1984)である。また、密度推定の手法は異なるがヒガシローランドゴリラでは0.43-0.47頭(Yamagiwa *et al.*, 1993), マウンテンゴリラでは0.68頭(Harcourt *et al.*, 1981)という推定がなされている。
- (5) 「アカ」は自称であるモ・アカ(mo.aka:単数), バ・アカ(ba.aka:複数)の語幹をとって命名された民族呼称である。
- (6) モタバ川の最上流地域での *Irvingia* 属のナッツの利用, またアカと農耕民との間のナッツや油の交換については, 北西が詳しい報告をおこなっている(Kitanishi, 1994)。
- (7) ただし, 農耕民の村落近くへの定住化が進んでいる地域のアカは跳ね鼠を狩猟活動の中心としている, あるいはゾウなど大型哺乳類の生息密度が比較的に高い後背地を抱えている最上流地域では, アカは農耕民が組織する銃猟に参加することが多い, といった地域的な変異も見られる。

謝 辞

本小論はトヨタ財団の1993(平成5)年度研究助成の研究報告書をもとにまとめたものである。コンゴ国での日本人による野外研究のパイオニアであり, 研究助成の代表者でもある弘前大学丹野 正教授には, これまで調査と研究の両面で多くのご助言とご助力をいただいていた。また, この小論をまとめるにあたって, 滋賀県立大学黒田末寿教授からは貴重なアドバイスをいただいた。

調査の実施に際しては, これまでコンゴ国の多くの機関や方々のご協力を仰いできた。

コンゴ国科学研究省, 同国森林経済省, 野生生物保護協会(WCS)コンゴ支部, 世界環境基金(GEF)コンゴ支部, 天理教会コンゴ支部, Rufin Antoine Oko博士, Paul Sita博士, Jean-Marie Moutsamblé博士, Jean Boyi博士, Jerome Dinga-Reassi博士。

記して我々の謝意を表したい。

文 献

Carroll, R.W. (1988) Relative density, range extension, and conservation potential of the lowland gorilla (*Gorilla gorilla gorilla*) in the Dzanga-Sangha region of southwestern Central African Republic. *Mammalia*, 3.

- Fay, J.M. and Agnagna, M. (1992) Census of gorillas in northern Republic of Congo. *American Journal of Primatology*, 27.
- Guthrie, M. (1967) *Comparative Bantu*. Gregg Press Ltd, Westmead.
- Harcourt, A.H., Fossey, D and Sabater-Pi, J. (1981) Demography of *Gorilla gorilla*. *Journal of Zoology*, 195.
- Ichikawa, M. (1986) Ecological bases of symbiosis, territoriality and intra-band cooperation of the Mbuti Pygmies. *Sprache und Geschichte in Afrika*, 7-1.
- 市川光雄 (1987) 人類の起源と進化(黒田末寿・片山一道と共著). 有斐閣, 東京.
- 市川光雄 (1993) アフリカ熱帯多雨林の持続的利用に関する研究. 京都大学アフリカ地域研究センター年報, Vol.7.
- Kano, T. and Asato, R. (1994) Hunting pressure on chimpanzees and gorillas in the Motaba river area, north-eastern Congo. *African Study Monographs*, 15.
- Kitanishi, K. (1994) The exchange of forest products (*Irvingia* nuts) between the Aka hunter-gatherers and the cultivators in northeastern Congo. *Tropics*, 4.
- 黒田末寿 (1991) チンパンジーとゴリラの種間関係. モンキー, Vol.35-2.
- Kuroda, S., Nishihara, T., Suzuki, S. and Oko, R.A. (in press.) Sympatric chimpanzees (*Pan troglodytes troglodytes*) and gorillas (*Gorilla gorilla gorilla*) in the Ndoki Forest. In McGrew, W.C. and Nishida, T. (eds.), *The Great Apes Revisited*. Oxford University Press, Oxford.
- Kuroda, S., Suzuki, S. and Nishihara T. (in press.) Preliminary report on predatory behavior and meat sharing in tschego chimpanzees (*Pan troglodytes troglodytes*) in the Ndoki Forest, northern Congo.
- Malenkey, R.K., Kuroda, S. and Vineberg, E.O. (1994) The significance of terrestrial herbaceous foods for bonobos, chimpanzees and gorillas. In Wrangham, R.W., McGrew, W.C., de Waal, F.B.M. and Helthne, P.G. (eds.), *Chimpanzee Culture*. Harvard University Press.
- 三谷雅純 (1990a) ドキ調査記. モンキー, Vol.31-2.
- 三谷雅純 (1990b) コンゴ国ボマサ地区の霊長類の現状. 霊長類研究, 6.
- Mitani, M. (1990) A note on the present situation of the primate fauna found from south-eastern Cameroon to northern Congo. *Primates*, 31.
- Mitani, M. (1991) Present situation of primate fauna found in northern Congo and in southeastern Cameroon in the central Africa. In Ehara, A. et al. (eds.), *Primate Today*. Elsevier Science Publishers (Biomedical Division), Amsterdam.
- Mitani, M. (1992) Preliminary results of the studies on wild western lowland gorillas and other sympatric diurnal primates in the Ndoki forest, northern Congo. In Itoigawa, N., Sugiyama, Y., Sackett, G.P. and Thompson, R. K. R. (eds.), *Topics in Primatology Vol.2, Behavior, Ecology, and Conservation*. University of Tokyo Press, Tokyo.

- Mitani, M., J. Yamagiwa, J. Oko, R.A., Moutsamboté, J.-M., Yumoto, T. and Maruhashi, T. (1993) Approaches in density estimates and reconstruction of social groups in a western lowland gorilla population in the Ndoki forest, northern Congo. *Tropics*, 4.
- Nishihara, T. and Kuroda, S. (1991) Soil-scratching behaviour by western lowland gorillas. *Folia Primatologica*, 57.
- 西原智昭(1994) コンゴ, スアバレ=ンドキ国立公園に生息するゴリラ (*Gorilla gorilla gorilla*) の密度推定と集団編成の特徴. アフリカ研究, 44.
- Nishihara, T. (1995) Feeding ecology of western lowland gorillas in the Nouabal-Ndoki National Park, Congo. *Primates*, 36.
- 佐藤弘明(1991) 定住した狩猟採集民バカ・ピグミー. 田中二郎・掛谷 誠(編), ヒトの自然誌, 平凡社, 東京.
- Sato, H. (1992) Notes on the distribution and settlement pattern of hunter-gatherers in northwestern Congo. *African Study Monographs*, 13(4).
- 佐藤弘明(1993a) 象肉が食えないバカピグミーの象猟人. 浜松医科大学紀要 一般教育, 7.
- 佐藤弘明(1993b) アフリカ・コンゴ熱帯雨林地域における医療と傷病. 公衆衛生, 57巻5号.
- 清水昭俊(1992) 永遠の未開文化と周辺民族 —近代西欧人類学史点描—. 国立民族学博物館研究報告, 17巻3号.
- Suzuki, S. (1993) Preliminary results of the studies on tschego chimpanzees (*Pan t. troglodytes*) in the Ndoki Forest, Congo. *A grant under the Mombusho international scientific research report*.
- Suzuki, S. and Nishihara, T. (1992) Feeding strategies of sympatric gorillas and chimpanzees in the Ndoki-Nouabale forest, with special reference to co-feeding behavior by both species. Abstract, 第14回国際霊長類学会学術大会, Strasbourg, France.
- 鈴木 滋・西原智昭・黒田末寿(1993) コンゴ, ンドキ・スアバレ保護区のゴリラとチンパンジーの食性重複. 第9回日本霊長類学会学術大会講演抄録.
- Suzuki, S., Kuroda, S. and Nishihara T. (1995) Tool-set for termite-fishing by chimpanzees in the Ndoki forest, Congo. *Behaviour*, 132.
- 竹内 潔(1991) アカにおける社会的アイデンティティ. 田中二郎・掛谷 誠編, ヒトの自然誌, 平凡社, 東京.
- 竹内 潔(1994) コンゴ北東部の狩猟採集民アカにおける摂食回避. アフリカ研究, 44.
- 竹内 潔(1995a) 狩猟活動における儀礼性と楽しさ —コンゴ北東部の狩猟採集民アカのネット・ハンティングにおける協同と分配. アフリカ研究, 46.
- 竹内 潔(1995b) アフリカ熱帯森林のサブシステム・ハンティング —コンゴ北東部の狩猟採集民アカの狩猟技術と狩猟活動. 動物考古学, 4.
- 武内進一(1992) アフリカにおける『民主化』の諸相 —コンゴの事例とザイールとの比較. アフリカレポート, 15.
- 武内進一(1993) コンゴ—不透明な民主化の動き—. アジ研ダイジェスト, 2.
- 武内進一(1994a) コンゴ: 作られた部族抗争. アフリカレポート, 16.
- 武内進一(1994b) コンゴ再訪: 動乱の後で. アフリカレポート, 19.
- Tanno, T. (1976) The Mbuti net-hunters in the Ituri forest, eastern Zaire: Their hunting activities and band composition. *Kyoto University African Studies*, 10.
- 丹野 正(1991) 『分かち合い』としての『分配』. 田中二郎・掛谷 誠編, ヒトの自然誌, 平凡社, 東京.
- Tutin, C.E. and Fernandez, M. (1984) Nationwide census of gorilla (*Gorilla g. gorilla*) and chimpanzee (*Pan t. troglodytes*) population in Gabon. *American Journal of Primatology*, 6.
- 早稲田大学探検部(1988) 幻の怪獣・ムベンベを追え. PHP研究所, 東京.
- Wilemsen, E.N. and J. R. Denbow (1990) Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts at revision. *Current Anthropology*, 31(5).
- Yamagiwa, J., Mwanza, N., Spangenberg, A., Maruhashi, T., Yumoto, T., Fischer, A. and Steinhauer-Burkart, B. (1993) A census of the eastern lowland gorillas *Gorilla gorilla graueri* in Kahuzi-Biega National park with reference to mountain gorillas *G. g. beringei* in the Virunga region, Zaire. *Biological Conservation*, 64.

(1996年5月31日受付)

(1996年8月2日受理)